

## 首里城正殿の屋根変遷

石井龍太

### 要 旨

琉球王国の王城であった首里城、その中心となる正殿の屋根について、本稿は出土遺物、文献、写真、絵図といった様々な資料を用いて、その変遷を学際的に明らかにすることを目的とする。

首里城正殿の歴史は10段階に分けられ、少しずつ西側に拡大していく。屋根は当初は瓦葺きだったがやがて板葺きに変わり、17世紀からは様々な色の瓦が混ざり合う屋根となる。瓦は灰色や褐色が中心だったが、18世紀以降は赤色瓦が少しずつ葺かれるようになり、19世紀までに赤色が半数以上を占めるようになったと考えられる。

キーワード：琉球諸島、首里城、屋根、瓦

### 1. はじめに

2019年10月31日未明、「首里城」で火災が発生した。もっとも被害が大きかったのは中心となる正殿で、隣接する北殿と南殿も全焼した。マスメディアは燃え盛る火災現場を連日報道し、合わせてその様子を眺め続ける人々の模様も映し出した。関東に住みつつ沖縄に通って研究を続ける生活を20年続けている私を知る人は、出会い頭にまるでお悔やみの言葉を投げる様に、この話題を口にしていた。全国的にひとしきり沖縄を象徴するニュースであったように思う。

いうまでもなく、厳密には政治的な権力を持つ王城としての首里城は19世紀後半に消滅しており、火災に遭ったのは1992年に復元されたものに過ぎないのだが、多くの報道のトーンは明らかに「首里城」が焼失したという文脈であった。また火災現場を眺める人々のまなざしも同じ文脈であっただろう。加えて、「戦後復興の象徴」（沖縄タイムス+プラス2019年11月15日）といった表現もみられ、さらには「首里の象徴的な建物」であり、観光ガイドからは火災後に観光客が急減しているという指摘（NHK NEWS WEB 2019年11月30日）も出、影響は多方面

に広がっている。現代の諸要素を織り交ぜながら、多様な意味でとらえられる事件であったと言えよう。

すでに復元に向けて多方面で活動が始まっているとされるが、一方で92年の復元から20余年の間に蓄積されてきたデータは多い。今回焼失した正殿については、昭和60・61年に行われた発掘調査の報告書が近年刊行され、考古学の観点から歴史の変遷を知る大きな手掛かりとなっている。本稿では92年の首里城復元に当たっても課題となり、今日まで様々な論が飛び交う首里城正殿の屋根に焦点を絞り、考古資料、文献資料、絵図、古写真といった多様な資料を駆使して、今日までに明らかとなった事柄を整理し、その実像を探ることとする。

## 2. 先行研究

首里城正殿の展開を考察するにあたり、主に火災による焼失とその後の建て直しに関する文献資料に基づくと、戦前戦後の復元も含めて大きく4つの時期区分が可能となるという（首里城研究グループ1989:16-17）。

一方で、正殿の発掘調査で確認された基壇は最大で7期に分けられる（図1）。それぞれの年代位置付けについては安里進氏による研究（安里1996）や発掘調査報告書（沖縄県立埋蔵文化

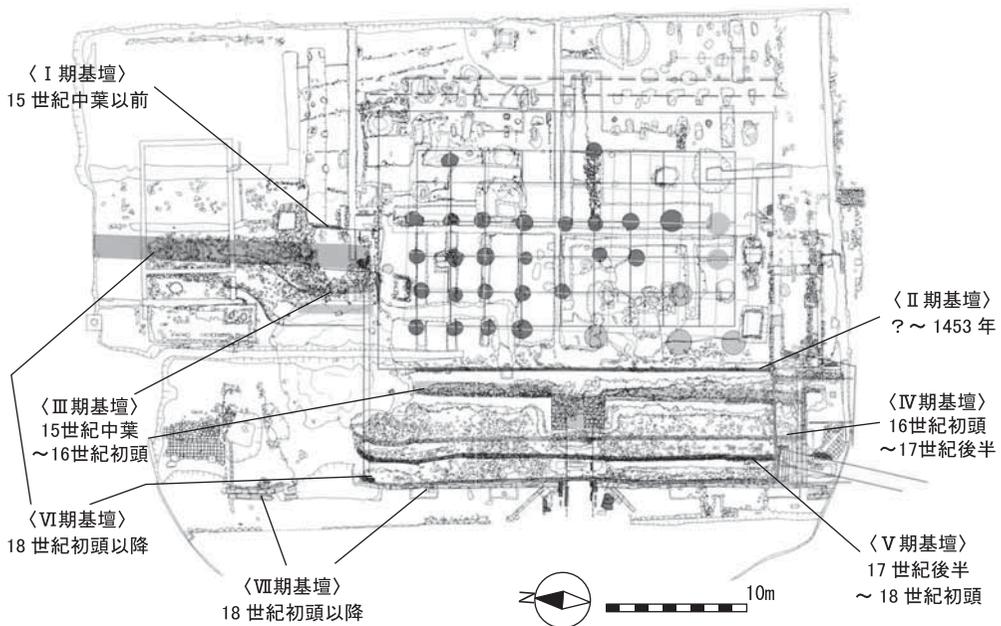


図1 首里城跡正殿地区の基壇遺構

※沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 23（一部改変）

財センター 2016) 等があり、この両者は概ね一致しているものの、安里氏は文献資料との積極的な対比を行っている(安里 1996: 17) 一方で、文献資料との整合性については慎重な意見も提示されている(沖縄県立埋蔵文化財センター 2016: 333)。ただ正殿基壇に関する先行研究は文献資料に登場する年代を参考にしつつ検討されてきた。

一方で、文献資料によってのみ確認される大規模改修も、発掘調査成果でしか確認されない大規模改修も存在したことが明らかになっている。その背景は様々に考えられるが、例えば火災後に基壇を踏襲して前の状態に復旧する場合は遺構としては残りにくいであろうし、火災に伴わず基壇を含めた改築まで行われた場合には文献に記載されないこともあったであろう。

### 3. 資料の分析

基壇の変遷を中心とした発掘調査の成果と、火災の記録を中心とした文献史学の成果を総合すると、正殿は最大で 10 時期に区分されると考えられる。本稿ではその内、1945 年までの首里城正殿の歴史について 9 時期区分を行って論を進める。ただし遺構や記述に残らない小規模な破損、修復も多数あったと考えるべきであり、その影響についても留意することとする。

#### 【第 1 期】1392?~?年 I 期基壇

首里城正殿の創建には不明な点が多い。王国の歴史書である『球陽』には 1392 年に高樓を建て察渡王が遊観したという記載(球陽研究会 1974: 162) が見られこれを最古とする意見もあるが、場所も城名も記述されておらず、また『球陽』は 18 世紀半ばになってから編纂されたものであり同時代資料ではない。同時代資料としては 1427 年の『安国山樹花木之記碑』がよく取り上げられる。「王城外安国山増而高之」(塚田 1970: 59) と王城の外での庭園整備の記載があることから、王城たる首里城がこの時には存在したことがうかがえる。

では当該期の首里城はどのような姿で、正殿はすでに建造されていたのだろうか。正殿地区の北側に隣接する淑順門西地区では 13 世紀後半~14 世紀初頭の遺物包含層が確認されており(沖縄県立埋蔵文化財センター 2013)、文献の記載に先行して同地での活動が行われていた可能性がある。

正殿地区においては、最古の基壇の時期が 15 世紀中葉以前とされており(沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 3 他)、発掘において I 期基壇とされた包含層は後の正殿建物の土台となる基壇の下層で確認されている。残念ながら I 期基壇は一部の包含層での確認のみのため、建物の規模は不明とされる。また後の首里城正殿は西面だがかつては南面していたという伝承<sup>(1)</sup>があるものの、その真偽は発掘調査では確定されていない(沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 333)。

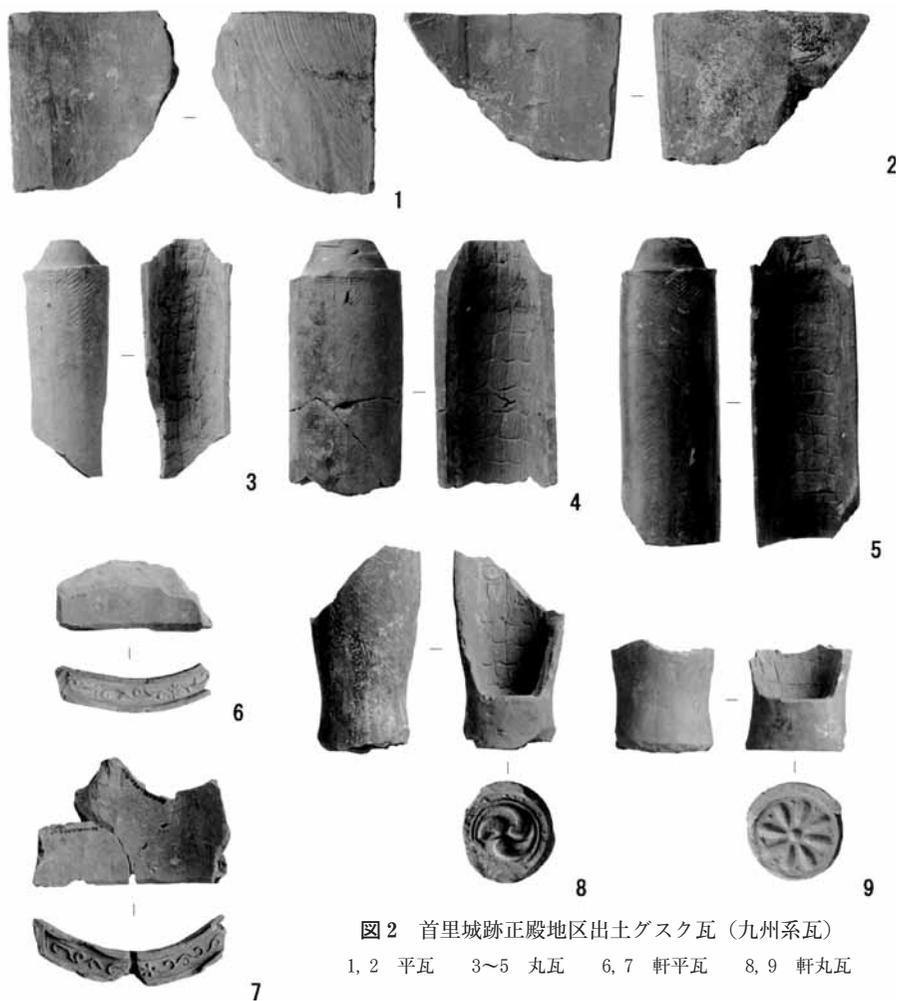


図2 首里城跡正殿地区出土グスク瓦（九州系瓦）

1, 2 平瓦 3~5 丸瓦 6, 7 軒平瓦 8, 9 軒丸瓦

出典：沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 194, 196, 202, 204, 208, 212

I期基壇とされた包含層からは瓦が大量に検出され、瓦葺き建物であったと推察されている。この瓦はグスク瓦、中でも九州系瓦（大和系瓦）とされる一群（図2）で、今日一般に知られる赤色瓦とは規格も色調も異なる。九州系瓦は正殿地区の発掘調査で出土した瓦全体の14%を占めており、トレンチ（発掘坑）からまとまって検出されている。平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、雁振瓦が確認され、色調は灰色と褐色を呈し、その比率は平瓦が58：42、丸瓦が56：44とされている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 168）。当時の首里城正殿は、灰色と褐色が6対4の割合で入り混じる瓦屋根景観であったことがうかがえるだろう。

### 【第2期】?～1453年 II期基壇

『球陽』によれば、1453年に首里城は王位継承をめぐる戦乱「志魯・布里の乱」によって「満城火起、府庫焚焼」とある（球陽研究会1974:174）。文献資料では被災の詳細は不明だが、発掘調査では首里城内各地でこの時の火災に伴うと考えられる痕跡が確認されている。正殿地区ではII期基壇とされる遺構の化粧石に被熱の痕跡が確認されており、該当するものと解釈されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:3他）。

なお文献資料ではこれが首里城最初の火災の記録だが、既にII期基壇であることから、焼失以前に基壇を含めた建て替えが行われ、規模が拡大していたことが分かる。II期基壇上の建物の屋根景観がどのようなものであったのかは判然としない。

### 【第3期】?～1456～16世紀初頭 III期基壇

火災により焼失した首里城がいつどのように再建されたのかは文献に記録が無いが、焼失から間もない15世紀中ごろの首里城正殿の様子が、『朝鮮王朝実録』にみられる。一つは1456年に沖縄諸島の久米島に漂着し、世祖七年（1462年）に帰国した朝鮮人梁成たちの記録である。「王城凡三重。外城有倉庫及廡。中城侍衛軍二百余居之。内城有二三層閣。大概如勤政殿。其王擇吉日往来居之。其閣覆以板。板上以鐵沃之。上層藏珍宝。下層置酒食。王居中層。侍女百余人。」とされる（中央研究院歴史語言研究所韓国国史編纂委員会<sup>2)</sup>）。もう一つが世祖七年（1462年）に宮古島に漂着し、沖縄島を經由して帰国した肖得誠たち8名による正殿の記録であり、「城有三重。皆石築。城高如我国都城而稍高。城門亦如我国。其城回互如曲水。兩城相距如一匹布長。」「国王居於二層閣。其閣皆着丹甍。覆以板。每鷲頭以鐵沃之。廊廡周回連接間數不能知悉。」とされる（中央研究院歴史語言研究所韓国国史編纂委員会）。首里城正殿についての二つの記録はほぼ一致しており、二層三階建てで屋根は板葺きであり、両者ともに記載される「以鐵沃之」の一文から錫で覆われていたと解釈されている（安里1996:14, 池間他2005:149, 151）。同じものではないが、鹿児島県の仙巖園には錫製の瓦が葺かれた錫門が存在し、白光りする独特の屋根景観を呈している。また肖得誠たちの記録に「鷲頭」とあることから大棟に飾りが置かれていたと考えられ、後者の一文はこの「鷲頭」にも錫がかけられていたとしている。そして「其閣皆着丹甍」とあることから赤く塗られていたと考えられよう。

『朝鮮王朝実録』の記載から約一世紀後の1534年来訪した中国の使者陳侃による『使琉球録』では「向南者七間向西者七間」「反以西者為正殿。閣二層，上為寢室，中為朝堂，末与臣下坐立」「皆以板代瓦」（原田1995:220）「王屋亦無獸頭」（原田1995:221）とあり、王城は正面（西側）7間，奥行（南側）7間で西を向き、二層三階建てであること、建物は皆板葺きであること、屋根

に獸頭は無いことが記される。『朝鮮王朝実録』では「覆以板。每鷲頭。以鑿沃之。」とされることから、屋根材と棟飾に違いがあることになる。両記録の間に屋根の変化があった可能性を検討しなければならないが、資料は乏しい。

発掘調査では、1453年に焼失した際の首里城正殿に該当するとされるⅡ期基壇の後、西側に拡大してⅢ期基壇が築かれており、基壇西側に面して石段が設けられ、15世紀中葉～16世紀初頭に位置づけられている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 333）。上記の板葺きの正殿は、このⅢ期基壇に築かれていたのであろう。発掘調査では板葺きの痕跡を確認することは難しいが、この時期の正殿を写したものとされるのが首里城西側に位置する王陵「玉陵」である。1501年に築かれたとされ（球陽研究会 1974: 191）、被葬者を納めた石造建造物は屋根が扁平な板石で葺かれていることから、板屋根を模したものと考えられている（那覇市 HP 他）。発掘調査成果と比すれば、Ⅲ期基壇とⅣ期基壇の境の時期に玉陵は築かれたことになり、正殿は増築、王陵は新築と相次いで工事されたとも考えられよう。

#### 【第4期】16世紀初頭～1660年 Ⅳ期基壇

文献資料には記載がないが、その後も首里城正殿の増築は繰り返されていたらしく、16世紀初頭～17世紀後半に位置づけられるⅣ期基壇がより西側に築かれている。後世の資料になるが、『頭より御物奉行への文書、口上覚』（1766年）には首里城は20年前後に修築していたものの40年が経過してしまった（平良市史編さん委員会 1988: 800）と記載されていることから、耐用年数に達する20～40年程度のサイクルで改築が繰り返されたと推察される。Ⅲ期基壇が概ね半世紀の存続期間とされることから、Ⅲ期基壇からⅣ期基壇への移行は上屋の改築に伴う増築であった可能性は考えられるだろう。

Ⅳ期基壇は雑石積みで仕上げられ、さながら補強用の裏込めの様相を呈し、Ⅱ期、Ⅲ期基壇とは差が見られることが指摘されている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 333）。化粧石が元々なかったのか、あるいは撤去されたのか、明確な結論は出していない。また存続期間は16世紀初頭～17世紀後半と約2世紀に渡っており、上述の再建サイクルに従うならば恐らくその間に上屋は4回以上の修築が行われたと推察される。

なお『球陽』によれば龍柱がはじめて設置されたのが1508年とされており（球陽研究会 1974: 192）、Ⅳ期基壇を含めた増築に伴う敷設であった可能性も指摘されている（安里 1996: 17）。ただし龍柱の設置場所など詳細の記載はなく、正殿の正面に對で置かれた後世の首里城正殿イメージに近いものであったのかは不明である。

**【第5期】1670～1709年 V期基壇**

尚質一三年（1660年）9月27日、失火により「焼盡王城宮殿」と『球陽』に記載される（球陽研究会1974:221）。再建には時間を要して尚質王代にはかなわず、続く尚貞王代に入った尚貞二年（1670年）に完成した。この時に屋根に手が加えられ、おそらくは15世紀半ば以来200年ぶりに正殿は瓦葺きとされた。「自古国殿竝宮室楼台皆用木板蓋之。今番改蓋以瓦以致壯麗鞏固。」（球陽研究会1974:231）とある様に、その目的は美観と頑健さにあったと推察される。また直前の正殿はやはり板葺きであったこと、かつて瓦葺きであったことは忘れられていた可能性が高いこともうかがえる。

正殿にはその後も手が加えられ続ける。上述した陳侃の『使琉球録』（1534年）では獸頭はなかったとされるが、1682年には初めて「五彩の竜頭彫臺」すなわち施釉された竜の頭の焼き物を置いたという記載が『球陽』に見られる（球陽研究会1974:241）。なお竜頭は近代期までに漆喰製に代わっていると指摘されるが（西村1993:131）、いつまで陶製であったのかは不明である。1704年には大規模な修補が行われ、翌年成就したと『尚姓家譜（伊江家）』『武姓家譜（嘉陽家）』に記載される。1670年の再建から30年余り経ち、耐用年数が来たためであろう。

発掘調査ではV期基壇が17世紀後半～18世紀初頭に位置づけられており、この再建時に再び西側への増築が行われた可能性が考えられる。

では17世紀後半からの首里城正殿の屋根景観はどのようなものだったのであろうか。残念ながら正殿地区の発掘調査ではこの時期の包含層や一括資料は検出されておらず、使用されていた瓦を特定するのは難しい。そこで近世琉球期の瓦生産の変遷や、首里城跡の他の地区の調査成果を手掛かりに考えてみることにしよう。

**瓦の生産**

琉球諸島の瓦は14世紀代のグスク時代まで遡るが、現在の島瓦の直接のルーツとなる「琉球近世瓦」「明朝系瓦」などと呼ばれる瓦の大規模恒常的な生産は16世紀以降であることが遺跡出土資料から確認されている。文献資料によれば15世紀以降、在留中国人商人や一部の琉球士族が瓦葺き建物に住んでいたらしく、16世紀には渡来中国人の渡嘉敷三良による瓦生産も行われ、その子孫が後々まで瓦を造り続けていたという。那覇市の宝口にあったとされる渡嘉敷三良が開いた窯の痕跡は未発見で、どのような瓦が生産されていたのかは判然としないが、那覇港の遺跡である渡地村跡でこの時期に位置づけられる鬼面や花を紋様にあしらった特異な瓦群が出土している。居留外国人の需要に応じて瓦が移入される、あるいは外国人技術者が来琉して生産を開始し、やがて沖縄島の人々にも瓦の生産と消費が広まっていったという展開を推察することは可能であろう（石井2016b:4-5）。

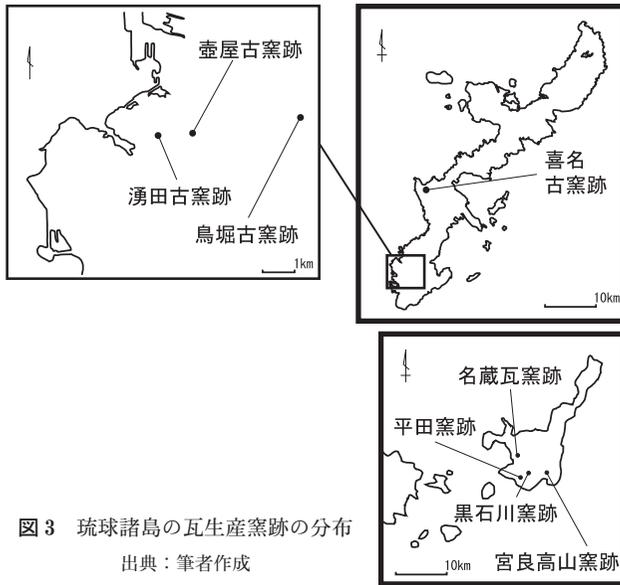


図3 琉球諸島の瓦生産窯跡の分布  
出典：筆者作成

琉球諸島の瓦生産はこうした小規模な生産を始まりとし、やがて16世紀には王国による官営事業にされていったと推察される。那覇市泉崎の湧田古窯跡は王府による初期の大規模な官営瓦工房であったことが確認されている（図3 沖縄県教育庁文化課 1993, 1994, 1997, 1999）。湧田古窯跡で出土する瓦は還元焼成という製法が採られており、色調は灰色ないし灰色になり切らない褐色を呈し、この点のみ上述したグスク時代の

瓦と同様だが、製作技法も規格も大きく異なる新しい時代の瓦である。

また那覇だけでなく、沖縄島読谷村に築かれた喜名窯（図3）でも瓦生産は行われていた。喜名窯は沖縄産無釉陶器（荒焼）と呼ばれる陶器の生産が行われており、瓦にも同じ土、同じ焼成法が用いられ、色調は小豆色で、硬質なものが生産された。見ようによっては赤色とも見えるが、現在の赤瓦とは明らかに異なる陶質瓦である。しかし喜名窯の瓦生産の年代は不明な点が多い。発掘調査では少なくとも17世紀後半から18世紀初頭には稼働していたとされ（上原他 2011: 56）、康熙九年（1670年）と康熙拾年（1671年）銘のある厨子が確認されること、18世紀前半に石垣島で喜名窯の技法が導入されたと推察される黒石川窯が開かれること、湧田窯の軒瓦と同じ型を用いて生産された紋様を持つ軒瓦が確認され、おそらく湧田窯からの技術指導とその後の統合を意味していると考えられること（石井 2016a: 24-26）、首里城跡淑順門西地区で湧田窯の瓦と共存していること（沖縄県立埋蔵文化財センター 2013: 250）から、おおむね17世紀から18世紀頃、湧田窯で灰色や褐色の瓦が生産されていた時期の内いずれかに位置づけられると推察されるが、文献資料にも考古資料にも明瞭な閉窯時期の根拠はなく、断定は難しいのが現状である。また喜名古窯跡での瓦の出土量は多いとは言えず、首里城跡でも淑順門西地区で出土例があるが、他の産地の軒瓦199点に対し19点の出土に留まっている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2013: 147）。おそらくは一時的に生産されたのみで供給量は少なかったと推察され、小豆色の瓦が屋根景観に及ぼした影響は限定的だったであろう。

現在の資料状況を踏まえて考察すると、沖縄島では16世紀から17世紀にかけては灰色や褐色の瓦が生産され、17世紀後半から18世紀前半以降には少量の小豆色の瓦が加わったと考えられる。

### 瓦の消費

上述した瓦の展開はあくまで生産の流れであり、消費地と連動こそするものの、一致する訳ではない点に注意が必要である。消費地の動向を考えるには、古材の転用と合わせて考えなければならない。ただ上述の通り、この時期に確実に位置付けられる瓦の一括資料は正殿地区では得られていないため、消費動向についても他の調査例を参照しながら推察していく必要がある。

1670年の再建は、正殿に琉球近世瓦が初めて用いられた改築であったため、使用された瓦はすべて新品としがちであるが、古材の転用が無かったとは言い切れない。何故なら首里城内で最初に瓦葺きにされたのは正殿ではないと考えられるからである。錢蔵東地区では16世紀代の灰色瓦がまとまって出土している（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016b）。西のアザナ地区では14世紀後半～16世紀の堆積層から瓦が折り重なるように出土しており、平瓦、丸瓦の出土比率が屋根に葺かれる際の使用比率と一致することから、どこかの建物で使用されていた瓦が一括廃棄されたものであると解釈されている。また出土した瓦の色調は灰色70%、灰褐色19%、褐色11%と報告されている（上原 1994: 154）。この瓦群が葺かれた屋根景観は、全体的に灰色ながら1～3割の褐色を含むまだら模様であったことがうかがえる。1670年に再建された正殿も、こうした灰色と褐色のまだら模様であったろう<sup>③</sup>。なお正殿Ⅰ期基壇の九州系瓦が灰色6割、褐色4割であったことと比べると、色調は灰色にやや統一されてきたといえるだろう。

### 【第6期】1712～?年 VI期基壇

上述の通り、1670年に改めて瓦葺きとなった首里城正殿は、1704年に大規模修理されている。しかしそれから間もない1709年、『球陽』によれば尚益王が即位して20日目、「国殿及南北諸殿盡遭焼燼」とあり（球陽研究会 1974: 257）、再び王の交替期に火災に見舞われている。同年には台風にとまなう大飢饉が発生し、4,000人近い死者が出、盗賊も発生していたようだ（球陽研究会 1974: 257）。再建は急がれ、完成は1712年と『中山世譜』に記録され（横山 1940: 131）、同年に尚敬王が即位している。

この時期に比定される基壇は、18世紀初頭以降に位置づけられているVI期基壇であろう（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 333）。再建に当たり、改めて増築が行われたことがうかがえる。安里進氏は後続するVII期基壇と一体のものであるとしている（安里 1996: 17-18）が、報告書では「VII期基壇化粧石の裏込めのようにみえる雑石積み」としつつ、後続するVII期基壇に伴う石階段の下に石段が残存すること、正面石積みにつながる南北面に石垣が取り付くこと、南西側で南殿のV期基壇と接続することから、VII期基壇より前の基壇としている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 22）。年代は18世紀初頭以降とされ、VII期基壇との時期差は判然としないとする（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 333）。

この再建時も瓦葺きにされたと考えられるが、この時の正殿の屋根景観については、赤色瓦の登場時期を巡る複雑な課題がある。まず1682年、灰色や褐色の瓦の中心的生産地だった湧田窯が、沖縄島各地の窯と共に牧志に統合されると『球陽』に記録される(球陽研究会1974:241)。現在に至る那覇の壺屋の成立に関する記録とされ、窯業生産を再編し集約しようとする王府の意図がうかがえる。湧田窯よりも首里に近く、那覇港にも近いため資材の搬入にも製品の搬出にも便利な立地といえるだろう(図3)。

この壺屋にて生産されたと考えられる瓦には灰色・褐色のものと赤色のものがあり、おそらく17世紀末から18世紀にかけてのいずれかの時点で、それまで用いられてきた還元焼成から、赤色に焼き上げる酸化焼成へと技法が変更されたと考えられる。著名な資料として、焼成前に「乾隆三年(1738年)」とヘラ書きされた赤色の丸瓦が確認されており(大川1962:116)、現在のところ年代が確実に分かる最古の赤色瓦となっている。傍証として、1737~1750年に行われた間切調査の成果に基づいて製作された『間切図』(沖縄県立博物館・美術館2019:48)に描かれた建築の屋根は赤色に着色されている。問題は灰色・褐色瓦から赤色瓦へと生産が移行した時期だが、開窯された17世紀後半からの一定期間は壺屋窯でも灰色・褐色の瓦の生産が行われていたと考えられる<sup>(4)</sup>ことから、文献資料、紀年銘資料の年代に依拠するならば1682年~1738年の何れかの時点で移行したことになるだろう。なお瓦生産は那覇市の鳥堀でも行われていた(図3)。窯跡の発掘はなされていないが、灰色に焼けた瓦片が採集されている。鳥堀窯は『首里古地図』に記載されており、記載情報は1700年代初頭頃を基本とするとされることから、この頃には灰色瓦が生産されていたことがうかがえる。なお現存する『首里古地図』は1910年に複製されたものであるため参考に留まるが、描かれた首里城正殿(図4-1)はじめ城内の建築、さらに円覚寺や天界寺の屋根はほぼ全てが濃紺色に、壁は赤色に塗られている(沖縄県立図書館HP)。

現在の資料状況を踏まえて考察すると、18世紀前半の沖縄島では灰色や褐色の瓦を中心に若干の小豆色瓦が使われており、赤色の瓦は18世紀第2四半期には存在するが、生産開始がどこまで遡るのかは判然としない。なお首里城と直接の関係はないが、瓦の色調変化が比較的明瞭なのは石垣島の瓦生産であり、1694年から1732年まで稼働していた名蔵窯跡からは灰色や褐色の瓦が出土するが、それ以後に開かれた黒石川窯跡からは出土せず、陶器生産と統合されて小豆色や暗赤色を呈する瓦が出土する。石垣島の瓦生産の展開が沖縄島と連動したのなら、灰色瓦の生産は18世紀前半頃まで続いた可能性もまたあると考えなければならないだろう。

1712年に再建された際の首里城正殿の屋根景観は、瓦生産がちょうど灰色や褐色から赤色へと移行する端境期に当たるため断定が難しい。ただ石垣島における状況を見ると、灰色や褐色を中心に小豆色が混ざる、第5期と同様の屋根景観だった蓋然性が高いであろう。ちなみに首里城

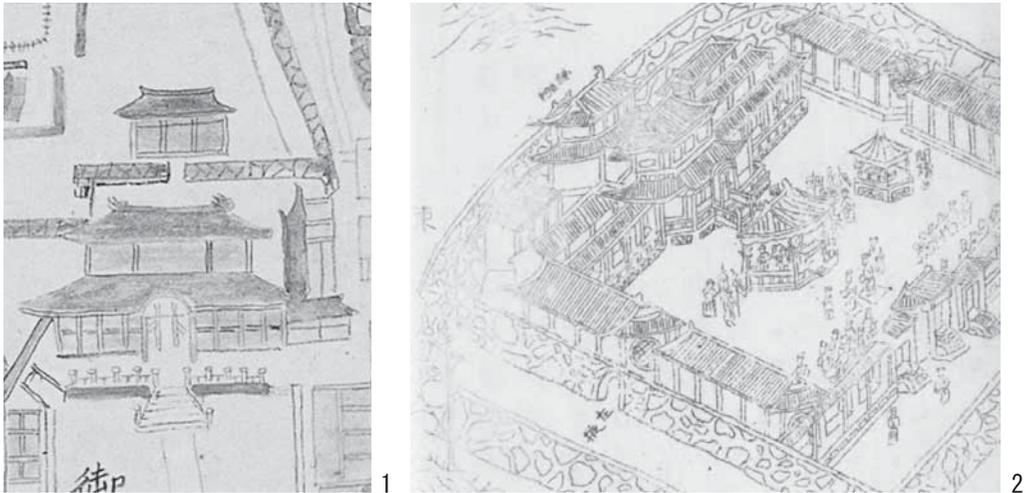


図4 近世琉球期の絵図に見る首里城正殿

1、『首里古地図』 2、『中山伝信録』

出典：図4-1：『首里古地図』 沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0 (一部改変) (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

図4-2：『中山伝信録：訳註. 卷之2』『国立国会図書館デジタルコレクション』36 コマ

のすぐ北に存在した円覚寺跡の発掘調査では龍淵殿地区で木炭と火熱した瓦が集中した石積みが確認されており、1721年に円覚寺が焼失した際の廃棄場所とされている。報告書ではここから灰褐色の平瓦と丸瓦が出土しており（沖縄県立埋蔵文化財センター2002: 29, 92-96）、18世紀前半に葺かれていたことがうかがえる。

また正殿の大きな変化として、唐玻豊を巡る問題がある。中国から来琉した冊封使の徐葆光による『中山伝信録卷第二』（1719年）には正殿の絵図が掲載されており、正殿正面に唐玻豊が描かれ（図4-2）、また正殿は正面9間とされる（琉球大学附属図書館HP）。唐玻豊はこの時期までに取り付けられ、また正殿は陳侃の『使琉球録』（1534年）の記録より2間広く、後の正面11間×7間から両外周の2間分を除いた基本形がこの時完成していたとされる（安里1996: 15）。但し唐玻豊の創建が何時なのかは定かでない。

#### 【第7期】?～1879年 VII期基壇

正殿は18世紀以後20世紀まで大きな火災に遭うことはなかったが、発掘調査でVII期基壇が検出されている。ただ上述の通り、VII期基壇は報告書ではVI期基壇と同じ18世紀初頭以降に位置づけられており（沖縄県立埋蔵文化財センター2016a: 333）、一体のものであった可能性も捨てきれない。

ただ正殿の耐用年数が20～40年とするならば、1712年に再建してから王国が解体される1879

表1 18～19世紀における首里城正殿の重修記録

1722年（康熙61）	首里城正殿，普請する。奉神門の改修を詮議。『笑古漫筆』
1728年（雍正6）	首里城大破により，修補する。翌年起工，成就する。『尚姓家譜（伊江家）』
1729年（雍正7）	首里城正殿重修する。『球陽』
1766年（乾隆31）	中山王居宅（首里城正殿）大破につき，翌年にかけて修補の計画が立てられる。『琉球館文書』 さらに中城御殿，琉仮屋（薩州琉館）も重修の予定。『球陽』
1768年（乾隆33）	首里城を重建する。前年起工し，本年成就する。『球陽』
1803年（嘉慶8）	首里城正殿，普請する。『百浦添御殿御普請日記』
1811年（嘉慶16）	首里城王殿を重修する。『百浦添御殿御普請日記』
1842年（道光22）	首里城正殿，普請する。（～1846年）『百浦添御殿御普請日記』（二）（三） 『百浦添御普請日記』
1846年（道光26）	首里城正殿を重修する。『球陽』『蘇姓家譜（奥島家）』

年までの160年余りの間に修復が3～7回程度行われたはずであり，Ⅶ期基壇がⅥ期基壇と異なる時期の遺構であるのなら，その何れかに伴って築かれたと考えられよう。実際に首里城正殿の数年がかりの大規模修復記録は概ねこのスパンで残されている（表1）。

表に掲載した以外にも，台風等によって瓦が破損すれば小規模な修復や葺き替えが行われたと考えられよう。この時期の屋根景観は，こうした繰り返される大小の改修の度に新品の赤色瓦が追加されることで，徐々に赤色の割合が高まっていったと推察される。

#### 【第8期】1879年～1924年 Ⅶ期基壇

1879年に明治政府による一連の「琉球処分」が完了し，首里城は王城としての役割を失う。その後は派遣された熊本鎮台沖繩分遣隊が首里城に1896年まで駐屯しているが，この時期に進められた改変の詳細は判然としない。ただ正殿は取り壊しを免れ，当時の地図には兵卒の寝室に使用されたことが確認される。しかし古写真を見る限り，屋根の軒先は波うち，一部は支えが無ければ崩れ落ちる危険な状態になっており，適切なメンテナンスが行われず老朽化は進行し続けたことがうかがえる。また龍柱はじめ城内の破壊荒廃が進んだことはよく知られる。

分遣隊が引き上げた後は学校や役所として城内が使用されており，一部の建物は校舎等に使用されたが，正殿は老朽化が続いた様だ。修復や再利用の目途が立たないまま，1923年には遂に正殿の取り壊しが決議されるが，鎌倉芳太郎，伊藤忠太らによって中止され，1924年に沖繩神社拝殿，1925年には国宝に指定され，解体修理が行われている。

この時期の首里城正殿の屋根景観は，基本的に近世琉球期末のままであったろう。琉球王国による正殿の修復は1846年の記録が最後となり，1879年には「琉球処分」によって王国が解体されて首里城は王城としての使命を終える。18世紀の半ば以降の瓦生産は，上述の通り恐らく赤

瓦に移行したと推察され、正殿の修復の際に古材と共に赤瓦が少しずつ追加されていったと推察される。この推察を検証するため、本稿では近代期に撮影された古写真と考古資料の比較を行うこととする。

### 古写真と考古資料の比較

琉球諸島の瓦屋根を撮影した近代期の古写真には、軒先に並ぶ軒平瓦や軒丸瓦の紋様部が確認できるものがある。琉球近世瓦の軒瓦の紋様部は特定の色調に固定されるため、具体的な色調が不明な白黒写真であっても、紋様を手掛かりにある程度まで色調を絞り込むことが可能である。なお本稿で用いる紋様の分類には石井が設定した名称を用いる（石井 2006）。

### 古写真「正殿屋根に使われていた軒平瓦」「正殿屋根に使われていた瓦」

上述の通り、1923年に正殿の解体が行われた。正殿修理の工事監督であった柳田菊造氏が1930年から33年に撮影したガラス乾板写真「正殿屋根に使われていた軒平瓦」「正殿屋根に使われていた瓦」は、最末期の首里城正殿の屋根景観を考える上で貴重な資料といえるだろう（図5-1, 2）。この内、「正殿屋根に使われていた軒平瓦」には8点の軒平瓦と8点の飾り瓦が、「正殿屋根に使われていた瓦」には9点の軒丸瓦と、軒平瓦、軒丸瓦それぞれの紋様部を作る型「瓦当筈」2点が写されている。遺跡出土資料と比較し、紋様から色調が類推できる軒平瓦、軒丸瓦を分類すると以下のようになる（表2）。限られた資料ではあるが、色調が確認できる資料13点の中に灰色か褐色に限定されるものが3点含まれており、赤色以外の可能性も含むものと合わせると6点に達する。これが全体の比率と対応するのであれば、1923年の解体時の首里城正殿の屋根は1/2～1/4程度が赤色以外の瓦に占められたことがうかがえる。

表2 古写真「正殿屋根に使われていた軒平瓦」「正殿屋根に使われていた瓦」の軒瓦分類表

軒平瓦			軒丸瓦		
瓦当紋様の分類	点数	色調他	瓦当紋様の分類	点数	色調他
崇元寺 A	2	灰色、褐色	湧田古窯 U	1	灰色、褐色、小豆色
内間御殿 A, 天界寺 B, 天界寺 C のいずれか	1	灰色、褐色、赤色	内間御殿 A	1	灰色、褐色、赤色
崇元寺 B	1	赤色	内間御殿 B	1	灰色、褐色、赤色
奉神門①	1	赤色	下之御庭 B	1	赤色
崇元寺 C	1	赤色	崇元寺 C	1	赤色
下之御庭 A	1	赤色	内間御殿 C	1	赤色
不明	1	大型品	不明	3	大型品

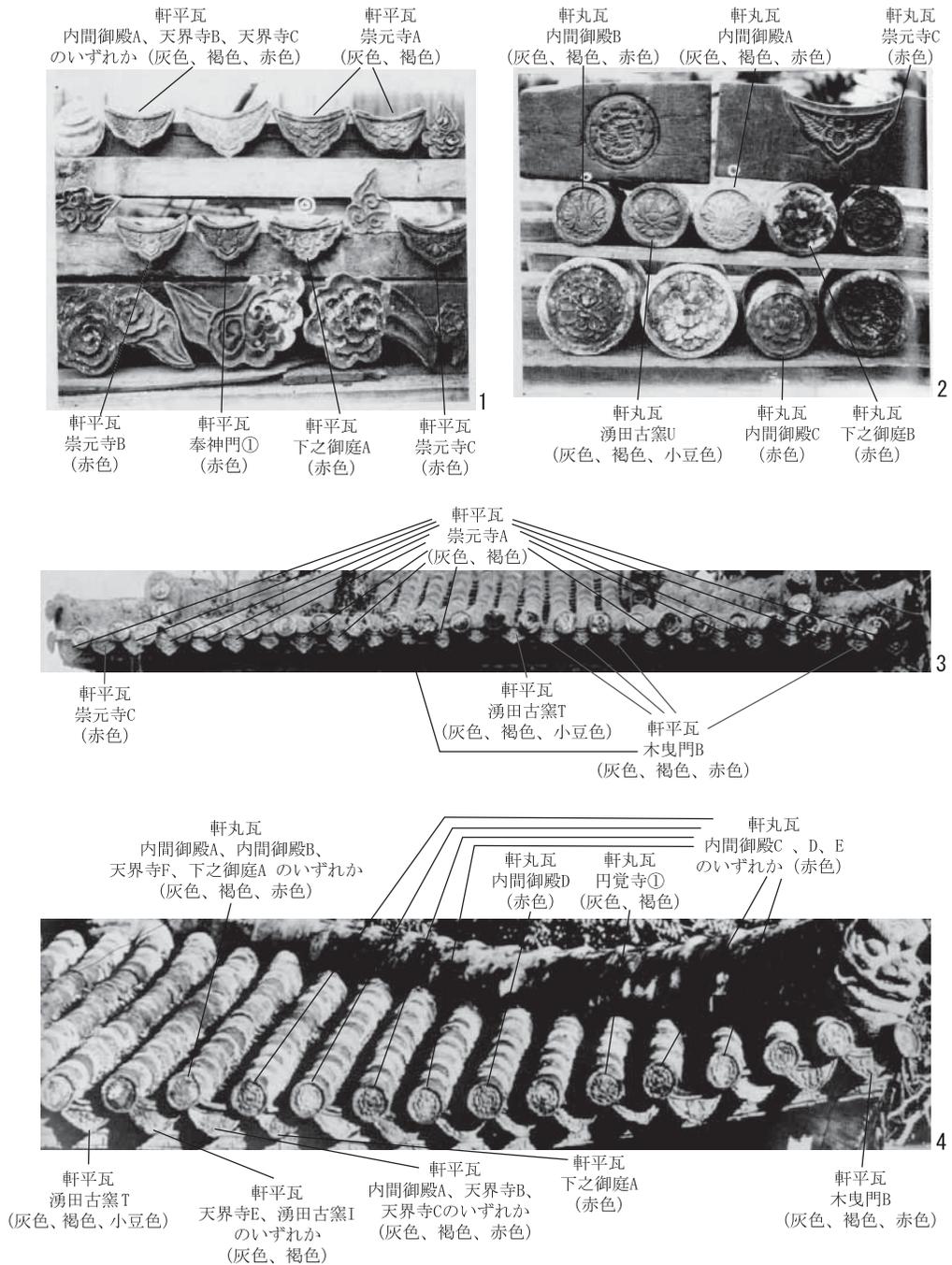


図5 古写真に見る琉球近世瓦

1, 「正殿屋根に使われていた軒平瓦」 2, 「正殿屋根に使われていた瓦」

3. 「天久権現宮」(部分) 4, 「円覚寺の鬼瓦」(部分)

出典：図5-1, 2：沖縄県文化振興会 公文書管理部 2001: 展示番号117, 118

図5-3：沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎撮影

図5-4：日本民藝館所蔵 坂本万七撮影

表3 古写真「天久権現宮」の軒平瓦分類表

瓦当紋様の分類	点数	色調他
崇元寺 A	13	灰色, 褐色
木曳門 B	5	灰色, 褐色, 赤色
湧田古窯 T	1	灰色, 褐色, 小豆色
崇元寺 C	1	赤色
不明	6	

古写真「天久権現宮」

正殿以外にも、近世琉球期から存在した建物の瓦屋根を撮影した写真資料が存在する。鎌倉芳太郎氏が大正 15 年（1925 年）に撮影した天久権現宮の写真（図 5-3）では、軒丸瓦は判然としないが軒先に並ぶ 25 枚の軒平瓦の内、灰色や褐色にしかない紋様が確認できるものが半数以上を占め、赤色と断定できるものは 1 枚に過ぎない（表 3）。

古写真「円覚寺の鬼瓦」

坂本万七氏が 1939 年あるいは 1941 年に円覚寺を撮影した写真のうち、軒先の瓦が判読できる「円覚寺の鬼瓦」（図 5-4）を出土資料と比較する（表 4）と、軒平瓦 18 点のうち赤色に限られるものは 1 点、灰色か褐色に限られるものが 1 点、灰色か褐色、あるいは陶質の小豆色瓦の可能性もあるものが 1 点、灰色、褐色、赤色のどちらもあるものが 2 点、それ以外は不明となる。軒丸瓦は 14 点のうち、赤色に限られるものは 7 点、灰色か褐色に限られるものが 1 点、灰色、褐色、赤色のどちらもあるものが 1 点、それ以外は不明である。色調が不明瞭なものが多いので判断に迷うが、少なくとも赤色ではないと特定される瓦が葺かれていたことは間違いないだろう。

表4 古写真「円覚寺の鬼瓦」の軒瓦分類表

軒 平 瓦			軒 丸 瓦		
瓦当紋様の分類	点数	色調他	瓦当紋様の分類	点数	色調他
天界寺 E, 湧田古窯 I のいずれか	1	灰色, 褐色	円覚寺①	1	灰色, 褐色
湧田古窯 T	1	灰色, 褐色, 小豆色	内間御殿 A, 内間御殿 B, 天界寺 F, 下之御庭 A のいずれか	1	灰色, 褐色, 赤色
内間御殿 A, 天界寺 B, 天界寺 C のいずれか	1	灰色, 褐色, 赤色	内間御殿 D	1	赤色
木曳門 B	1	灰色, 褐色, 赤色	内間御殿 C, D, E のいずれか	6	赤色
下之御庭 A	1	赤色	不明	5	
不明 ※大半は内間御殿 A かその類例と推察される。	13				

表5 絵図資料に見る19~20世紀の首里城正殿

種別	資料名	正殿屋根の色調
絵図	首里那覇港図屏風(19世紀)	暗赤色
絵図	日本遠征記(19世紀半ば)	明赤色
絵図	紙本淡彩沖縄風景絵図(1932年)	赤色
着色写真	Castle of the Loo Chooan king(年代不明 図6-1) Stone Dragon at Foot of Steps of Old Palace(年代不明 図6-2)	黒色
着色写真	伊藤勝一提供沖縄関係資料(年代不明 図6-3~5))	黒色, 赤色



1



2



3



4



5

図6 着色写真に見る首里城正殿

- 1, Castle of the Loo Chooan king  
2, Stone Dragon at Foot of Steps of Old Palace  
3~5, 伊藤勝一提供沖縄関係資料

出典：図6-1, 2：琉球大学附属図書館所蔵 図6-3, 4, 5：沖縄県立図書館所蔵（年代不明）

### 絵図資料，着色写真

瓦屋根景観の具体的な色調が示された資料として、絵図資料，着色写真は注目される（図6）。色調をまとめると以下の様になる（表5）。

絵図資料は、明暗の差はあるものの全体的に赤色にまとまることうかがえる。一方で着色写真には振れがある。1911年に那覇へ赴任し、25年に日本を離れるまで沖縄に渡り続けた宣教師アール・ブル氏によるガラス板写真のうち、「Castle of the Loo Chooan king」（図6-1）と「Stone Dragon at Foot of Steps of Old Palace」（図6-2）は、多くの子供たちが映り込んでいることから学校や役所として使用されていた時期の写真であり、屋根の色は黒色である。なお公開されているブル氏の写真には多くの瓦屋根が写されているが、「Village Church, Yontanzan」が赤く着色されているのを除きすべて黒色にされている点は興味深い。また沖縄県立図書館が所蔵する「伊藤勝一提供沖縄関係資料」の中にある着色絵葉書も注目される。首里城正殿を映したものは5枚あり、うち2枚は重複するため3種確認される。この3種のうち、取り壊し以前の写真を用いた絵葉書は同じ写真素材を2通りに着色しており、一つは暗赤色に（図6-4）、もう一つは黒色の瓦屋根となっている（図6-3）。

この時の首里城正殿は混色瓦屋根であり、また老朽化が進み、カビや埃によって黒ずんでいたと推察される。赤黒2通りの着色写真は、同じ対象を全く実態と異なる色調に着色した訳ではなく、当時の正殿が黒とも赤ともとれる色調であったということではないだろうか。

18世紀前半から生産された赤色瓦は、150年近くの間じわじわと瓦屋根に広がり、琉球王国時代末には過半数に至った。しかし建物ごと、時期ごとに差はあったとはいえ、屋根全体の1/2～1/3は赤色瓦では無かったことがうかがえよう。古写真に見るように、近世琉球期に建てられ近代期まで残された瓦葺き建物が、混色の屋根景観であったことは間違いない。絵図資料や着色絵葉書では暗赤色、赤色、黒色と振れを含んでいるが、経年劣化によるカビ、埃の堆積と共に、灰色や褐色、小豆色との混色であったことも関係していると推察される。

### 【第9期】1934～1945年 VII期基壇

上述の通り、20世紀に入っても正殿は残っていたものの老朽化は進んでおり、修復や再利用の目途が立たないまま、1923年には遂に正殿の取り壊しが決議される。しかし鎌倉芳太郎、伊藤忠太らによって中止され、1924年に沖縄神社拜殿、1925年には国宝に指定され、解体修理が行われている。工事は困難なものだったとされるが、1934年には落成した（甦る首里城と復元編集委員会1993:302）。

ではこの「沖縄神社拜殿」となった首里城正殿の屋根景観はどのようなものだったのだろうか。

複数の観点から迫ってみたい。

### 考古資料

発掘調査で出土した資料のうち、この時期に特定できる一括資料は得られていない。ただ注目すべき資料として、黒色に塗装された赤瓦がある（図7 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 168-172, 175-220）。報告書ではマンガン釉とされ、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦といった幅広い種類が確認される。首里城跡内や発掘調査では過去にも出土例がある。ただ黒色の皮膜は薄く、実際には黒ずんだ赤色を呈したものもあり、また黒色の定着が悪いため剥落している資料も見られることから、恐らく葺かれているうちに風化が進み、赤くなってしまったものもあったと推察される。黒色が塗布される範囲はまちまちだが、屋根に葺かれた際に露出する面に限定される資料がみられることから、屋根景観を暗赤色に見せるための措置と判断される。

報告書ではその使用について特に言及はないが、黒塗りの丸瓦は絶対的に少ない（沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 171）とされている。正殿の発掘を担当し、瓦の研究者でもある上原静氏は「正殿の屋根をふくには数が少ない。戦前、首里城を沖縄神社にした時、拝殿としての正殿の奥に、神殿などの黒い瓦をふいた小さな建物を造ったのではないか」と答えている（沖縄タイムス+プラス 2019年12月16日）。

なお復元修理に当たっては、古色を出すため新しい建築資材が黒く着色されることがあった様だ。瓦に関する記載ではないが、当時の状況について、「向拝を支える四本の柱のうち向かって



図7 首里城跡正殿地区出土黒塗り赤色瓦

1, 2 平瓦 3 丸瓦  
4, 5 軒平瓦 6, 7 軒丸瓦

出典：図7-1, 2, 3：沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 186 図7-4, 5：沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 184  
図7-6：沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 180 図7-7：沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a: 21

左から二番目の柱は新材の柱に取りかえられた。そしてはじめ他の三本の古い彩色柱と調和させようとしてピンク色に塗ったが、あまりにも鮮明すぎるといって藁たわしで半ば洗い落とし、その上から黒色をうすく塗った」(甦る首里城と復元編集委員会 1993: 302) という。当時の試行錯誤が偲ばれる記載だが、カビと埃で黒ずんだ中古の瓦と合わせるため、新品の赤色瓦に黒い着色が行われた可能性はあるだろう。

#### 文献資料

沖縄神社拝殿修理事務所が作成した『国宝建造物沖縄神社拝殿修理工事新設計内訳書』によれば、「屋根瓦ノ使用ニ堪ヘ得ルモノ全部古漆喰掻キ落シ充分掃除ヲナシ不足分ハ在来ノ形ニ倣ヒ上焼補充シ」(沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 1987: 141) とあり、近世琉球期に葺かれた瓦がそのまま使用されたことがうかがえる。

なお購入された瓦一覧も記録されており、巴瓦(筆者註:丸瓦)450枚、唐草瓦(筆者註:軒平瓦)370枚、雁振瓦151枚、平瓦丸瓦105坪分、鳥衾瓦8枚、飾瓦7枚、雲瓦の大15枚、中50枚、小25枚となっている(沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 1987: 154)。1992年に復元された正殿の延床面積が約1,199m<sup>2</sup>(内閣府沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 2016: 4)とあることから、新規購入された平瓦、丸瓦105坪(約340m<sup>2</sup>)は屋根全体の概ね1/3~1/4程度であり、おそらくは大目に購入したものと考えられるが、最大でそれだけ屋根景観に占める赤色の割合が高くなったことだろう。上述の通り、近世琉球期末の首里城正殿の屋根は1/2~3/4程度が赤色瓦に占められていたと考えられるため、単純計算で2/3~3/4まで屋根の赤色の比率が上がった可能性がある。但しこの概算は追加された瓦が赤色瓦だった場合の話であり、黒塗り赤色瓦だった場合は逆に赤色の比率は減少したであろう。

#### 写真資料

上述した沖縄県立図書館が所蔵する「伊藤勝一提供沖縄関係資料」の中にある着色絵葉書のうち、首里城正殿を映した3種中1種は、沖縄神社拝殿となってからの写真を用いた絵葉書である(図6-5)。屋根は暗赤色に着色されている。

#### 米軍撮影動画

2014年、戦災を受ける直前の首里城を映したカラーフィルムが発見され、ニュース報道されて話題を集めた(琉球新報 2014年4月21日他)。太平洋戦争の資料収集に取り組む市民グループ「豊の国宇佐市塾」が、米国の国立公文書館から購入したフィルムの中に写っていたもので、1945年4月下旬~5月上旬ごろ、日本軍の拠点を攻撃する米軍の爆撃機から撮影されたとみられる数秒の映像である。このフィルムでは首里城正殿の屋根瓦は黒く映っており、1992年時の復元に疑問を呈する証拠として現在もネット上で引用され続けている。

このフィルムに写されている首里城正殿、北殿、南殿は確かに黒い屋根に見える。ただ注意し

首里城正殿の 時期区分	首里城正殿の 屋根変遷	文献史学の成果	発掘調査の成果	沖縄島における 瓦生産の展開	
【第1期】 1392?～?年	灰色、褐色の 混色瓦葺き	1392?～1453年	〈I期基壇〉 15世紀中葉以前	灰色、 褐色瓦 (九州系瓦)	
【第2期】 ?～1453年	?		〈II期基壇〉 ?～1453年		
【第3期】 ?～1462年 ～16世紀初頭	板葺き屋根	?～1456 ～1670年	〈III期基壇〉 15世紀中葉 ～16世紀初頭	灰色、 褐色瓦	
【第4期】 16世紀初頭～1660年	板葺き屋根		〈IV期基壇〉 16世紀初頭 ～17世紀後半		
【第5期】 1670～1709年	灰色、褐色、 小豆色の 混色瓦葺き	1670～1709年	〈V期基壇〉 17世紀後半 ～18世紀初頭		小豆色瓦
【第6期】 1712～?年	灰色、褐色、 小豆色、赤色の 混色瓦葺き	1709～1879年	〈VI期基壇〉 18世紀初頭以降		
【第7期】 ?～1879年	灰色、褐色、 小豆色、赤色の 混色瓦葺き		1709～1879年	〈VII期基壇〉 18世紀初頭以降	赤色瓦
【第8期】 1879年～1924年	灰色、褐色、 小豆色、赤色の 混色瓦葺き	1879～1924年	1879～1924年		
【第9期】 1934～1945年		1934～1945年			
【第10期】 1992～2019年	赤色の 単色瓦葺き	1992～2019年			

灰色、褐色、小豆色、赤色、  
黒塗り赤色の混色瓦葺き

図8 首里城正殿の時期区分と屋根変遷

出典：筆者作成

たいのは、首里城の周囲に広がる瓦葺き建物も、すべて黒い屋根に見える点である。また屋根の色が全て一様に黒い点も気になる点である。本資料は沖縄神社拜殿を映した貴重なカラーフィルムであることは間違いないが、色調の判断材料としては慎重であるべきだろう。

過去の首里城正殿の中で、この近代期の屋根景観の追究が最も難しい。複数の情報がある一方で、相互にかみ合わない内容になっている。本稿では最も蓋然性の高い仮説を探ってみることにしよう。

文献資料にみる通り、赤色瓦を補充しつつ古材を転用した場合は、単純計算で2/3～3/4程度が赤瓦に占められる屋根景観であろう。軍隊駐屯時代に長期間放置されたことで黒ずんだ灰、褐色、小豆色、赤色の瓦が再利用されたため、違和感なく混ぜて葺ける様に、黒塗り赤色瓦が追加されたと考えられることは可能であろう。出土量は決して多くないが、補充と考えれば少数である説明も付く。

近代期の首里城正殿の屋根景観は、灰色や褐色が2～3割、赤色瓦と黒塗り赤色瓦が8～7割を占める屋根景観だったと推察される。ただ黒塗り赤色瓦は着色部分が風化して徐々に赤色化したと考えられることから、月日が経つにつれ赤色の比率が増えていったのではないかと推察される。

#### 4. 考察、小結

以上の史資料の分析を踏まえ、首里城正殿の屋根景観を時期ごとに考察した。1992～2019年の現代瓦による赤色瓦葺き<sup>(5)</sup>の正殿を第10期として含め、蓋然性の高い可能性をまとめる(図8)。

このうち現時点で特に不明瞭なのが、第2期、第6期、第9期の正殿の屋根景観である。第6期、第9期が混色瓦屋根であったことは間違いないが、そこにどの程度の赤色瓦が使われていたかが判然としない。前者は赤色瓦の生産開始期がどこまで古くなるか、後者は黒塗り赤色瓦がどの程度正殿に使われていたかが判然としないためである。今後の新出資料や方法論の深化を待ちたい。

また首里城創建から1945年までの時期、正殿の屋根が全て赤色瓦で覆われた時期は無かったという点は強調しておきたい。古材の転用、色むらが当たり前の焼成技術であったことを考えれば、首里城正殿の瓦屋根はある時に真っ赤に様変わりしたのではなく、徐々に赤い色が増えていったとする方が妥当である。灰か黒か赤か、という単純な話ではなく、近代以前の全時期を通じて首里城正殿の屋根の色は混在しており、その程度が異なると理解すべきであろう。

## 《註》

- (1) 1534年に中国から来訪した使者陳侃による『使琉球録』では「以南者旧制不利於風水」とあり、続いて「反以西者為正殿」すなわち正殿は西向きであるとしている。
- (2) 「志魯・布里の乱」から数年後の記録であるものの被災の様子がまるでないこと、『明実録』には「府庫」の火災とのみあることから、「全焼のあととは思えない」と疑問を呈する意見（池谷他 2005: 147）もある。
- (3) 当時の首里城正殿の屋根景観を想像するにあたり、古代瓦がまだ屋根に残る奈良県の元興寺をはじめとする寺院建築の屋根は参考になる。
- (4) 灰色や褐色の軒瓦の中には、湧田窯では見られず消費遺跡でのみ出土する種類がある。生産遺跡からの出土例はまだないが、恐らく統合先の壺屋窯で生産されたものと推察される。
- (5) この復元の際に生産され用いられた赤瓦については様々なメディアで取り上げられているが、今回の火災に当たり、沖縄県内の瓦職人でつくる「沖縄県琉球赤瓦漆喰施工協同組合」が県に対し、焼けた瓦を廃棄せずに保存し再利用すべきとした要請は象徴的であった。報道によれば「赤瓦を再利用できるかどうかは職人が音や形を確かめることでしかわからない」とし、また「全焼した正殿に使われている赤瓦は5年前に亡くなった職人が手がけたもので、現在では手に入らない土がブレンドされているほか、高温で焼き上げる高い技術が使われているため、再現できない」とする（NHK WEB NEWS 2019年11月5日）。数十年前に復元された際の瓦が改めてブランドとなっていること、現在も琉球の瓦が生き続けその過程で失われるものもあったこと、そして過去に繰り返されてきた古瓦の再利用が今日も行われようとしていることを示しているといえよう。

## 引用文献

- 安里進 1996 「首里城正殿基壇の変遷」『首里城研究』2, 首里城公園友の会
- 石井龍太 2006 「琉球近世瓦当紋様集成と型式学的分類～琉球近世瓦の研究その2～」『東京大学考古学研究室研究紀要』20: 109-148
- 石井龍太 2010 「瓦当範の移動にみる琉球近世瓦の生産～琉球近世瓦の研究～」『南島考古』29: 77-92
- 石井龍太 2014a 「渡地村跡出土瓦の分析 ～琉球近世瓦の定義に関して～」『壺屋焼物博物館紀要』15: 23-43
- 石井龍太 2016a 「瓦当範の移動にみる琉球近世瓦の生産 その2 —— 琉球近世瓦の研究 ——」『南島考古』35: 15-28
- 石井龍太 2016b 「琉球近世瓦の展開と琉球近世史」『沖縄考古学会 2016年度総会・研究発表会（配布資料）』3-11
- 池谷望子・内田晶子・高瀬恭子 2005 『朝鮮王朝実録 琉球史料集成【原文編】』榕樹書林
- 上原静 仲宗根求 小原裕也 伊波勝美 上門大悟 2011 「喜名古窯跡（瓦編）」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』35: 43-105
- 大川清 1962 「琉球古瓦調査抄録」『文化財要覧 一九六二年版』琉球政府文化財保護委員会編: 103-121
- 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 1987 『首里城関係資料集』
- 沖縄県教育庁文化課 1993 『湧田古窯跡（Ⅰ）—— 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査 ——』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課 1994 『湧田古窯跡（Ⅱ）—— 県庁舎議会棟建設に係る発掘調査 ——』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課 1995 『首里城跡 南殿・北殿跡の遺構調査報告』沖縄県教育委員会

- 沖縄県教育庁文化課 1997 『湧田古窯跡（Ⅲ）— 県庁舎警察棟建設に係る発掘調査 —』 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課 1999 『湧田古窯跡（Ⅳ）— 県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査 —』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『円覚寺跡 — 遺構確認調査報告書 —』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 『首里城跡 — 淑順門西地区・奉神門埋蔵地区発掘調査報告書 —』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a 『首里城跡 — 正殿地区発掘調査報告書 —』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016b 『首里城跡 — 銭蔵東地区発掘調査報告書 —』
- 沖縄県立博物館・美術館 2008 『博物館企画展 図録 ずしがめの世界』
- 沖縄タイムス+プラス 2019年11月15日 「報道写真集 首里城」を緊急発行 県内書店で販売 売り上げは全額寄付」 (<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/497872> 最終閲覧日 2020年3月9日)
- 沖縄タイムス+プラス 2019年12月16日 「首里城の瓦は“黒”だった? 「中国人好みに捏造」は本当か 真相を探る」 (<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/510854> 最終閲覧日 2019年12月22日)
- 沖縄県文化振興会 公文書管理部 2001 『世界のウチナーンチュ大会記念企画展 写真にみる近代の沖縄』
- 沖縄県立図書館 HP 「古地図の概要」 (<https://www.library.pref.okinawa.jp/archive/contents/cat39/oldmaps.html> 最終閲覧日 2020年1月3日)
- 沖縄県立図書館 年代不明 『伊藤勝一提供沖縄関係資料 沖縄絵ハガキ・写真集』
- 沖縄県立博物館・美術館 2019 『グスク・ぐすく・城 — 動乱の時代に生み出された遺産 —』 展示図録
- 球陽研究会 1974 『球陽 原文編』 角川書店
- 国史編纂委員会 1986 『影印縮刷版（普及本）朝鮮王朝実録』 探求堂
- 首里城研究グループ 1989 『首里城入門 — その建築と歴史 —』 ひるぎ社
- 中央研究院歴史語言研究所 韓国国史編纂委員会 『明実録, 朝鮮王朝実録, 清実録資料庫』 (<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/mql/login.html> 最終閲覧日 2020年3月10日)
- 塚田清策 1970 『琉球国碑文記』 財団法人学術書出版会
- 内閣府沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 2016 『平成28年度事業概要 首里城公園』 ([https://www.daas.jp/search\\_site/detailInfo.php?a\\_id=24636](https://www.daas.jp/search_site/detailInfo.php?a_id=24636) 最終閲覧日 2019年12月23日)
- 那覇市 2019 「玉陵」 (<https://www.city.naha.okinawa.jp/kankou/bunkazai/tamaudun.html> 最終閲覧日 2019年12月24日)
- 西村貞雄 1993 「首里城正殿大棟龍頭棟飾りについての考察」 『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』 42: 107-142
- 原田禹雄 1995 『訳注『陳侃 使琉球録』』 榕樹書林
- 平良市史編さん委員会 1988 『平良市史 第八巻 資料編6 (考古・人物・補遺)』
- 横山重編 1940 『琉球史料叢書』 4, 鳳文書館
- 甦る首里城と復元編集委員会 1993 『甦る首里城』
- 琉球大学附属図書館 HP 「伊波普猷文庫 中山伝信録 巻2」 『琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ』 (<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/d-archive/s/viewer?&cd=00030182> 最終閲覧日 2020年1月5日)
- 琉球新報 2014年4月21日 『〈読んで学べる NIE〉 焼失前の首里城 カラー映像公開/米軍45年撮影/大分 (2014年4月21日, 社会面)』 (<http://nie.ryukyushimpo.jp/?p=7149> 最終閲覧日 2020年3月9日)
- NHK WEB NEWS 2019年11月5日 「首里城火災 焼けてしまった瓦も廃棄せず保存を 職人団体が

要請」([https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191105/k10012164591000.html?utm\\_int=detail\\_contents\\_news-related\\_001](https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191105/k10012164591000.html?utm_int=detail_contents_news-related_001) 最終閲覧日 2019年12月2日)

NHK NEWS WEB 2019年11月30日 「「1日も早く復元を」首里城火災から1か月 観光ガイドの思い」([https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191130/k10012197201000.html?utm\\_int=detail\\_contents\\_news-related\\_001](https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191130/k10012197201000.html?utm_int=detail_contents_news-related_001) 最終閲覧日 2019年12月2日)

## Transition of the Roof on Shurijo Castle Seiden

Ryota Ishii

### **Abstract**

Shurijo Castle Seiden was main shrine and the royal seat of the Ryukyu Kingdom. In this paper I study about the transition of the roof of Shurijo Castle Seiden using various materials such as excavated remains, literature, photographs, and drawn pictures.

Shurijo Castle's history is divided to ten stages and gradually expands to the west. Seiden was initially roofed with Kyusyu style clay rooftile, but eventually changed to wooden tile and from the 17th century it became a mixture of clay rooftiles of various colors, mainly gray and brown. Red clay rooftiles gradually began to be roofed in the 18th century, and occupied more than half by the 19th century.

**Keywords:** Ryukyu Islands, Shurijo Castle Seiden, roof, rooftile